令和元年度　さいたま市青少年健全育成地域の集い　参加報告

【日時】　令和元年 11 月 19 日（火）　9：50～11：30
【会場】　さいたま市民会館おおみや　大ホール
【主催】　さいたま市教育委員会
【後援】　さいたま市 PTA 協議会　青少年育成さいたま市民会議

【参加者】　松前、橋本、藤崎、矢内、黒田

【趣旨】

社会構造や雇用環境が急速に変化する時代を迎え、近い将来には、現在人間が行っている様々な仕事を機械が行うようになるなど、世界を取り巻く環境の変化も一層加速していくものと予想されている。このような状況の中で、子どもたちが、夢と希望を持ち、個性を発揮し、自らの未来を切り拓いていく力を育んでいくことが大切である。

そこで、全市域を対象とした市内教職員、ＰＴＡ関係者等による集いを開催し、小・中・高等・中等教育・特別支援学校並びに関係機関・団体が連携協力をより一層深めるとともに、地域ぐるみの青少年健全育成を図る。

【内容】
（1） 開会行事
・主催者挨拶
・来賓挨拶
・来賓紹介
・主催者紹介

（2） 講演

・講師　和田行男　氏（介護福祉士）

・演題　「認知症と子ども」

～講演内容～

講師の和田行男氏は、国鉄の電車修理工から民営化を機に福祉の世界へ大転身。介護福祉士として、特別養護老人ホーム勤務などを経験したのち、現在、㈱大起エンゼルヘルプの取締役として活躍する認知症ケアの第一人者です。和田氏は、今までの介護職の経験から、全国に 462 万人、あるいは多く見積もって実際には 600 万人位はいると言われる認知症患者との向き合い方についてお話し下さいました。

最初に、そもそも認知症とは、脳が機能しなくなり、脳と体の動きにズレが生じた状態である。そのことをきちんと認識することが大事であると指摘されました。そして、認知症患者の心と体のズレを理解した上で、和田氏は、認知症患者が働ける場を創り出したのです。それが「注文をまちがえる料理店」（ＮＨＫで紹介されました）です。この料理店で働く認知症患者は、注文をまちがえたり、十分なサービスができません。これは仕方ないことであると、お客様には寛容な気持ちで理解していただくことが、このお店を成立させる大前提となります。さらに、和田氏は、今までは普通に働くことが認められず、暗く引きこもりがちだった認知症患者のイメージを払拭すべく、患者さんたちが生き生きと働く姿を、メディアを通じて広く紹介し、まだ十分働けるということを厚労省に対してもアピールしたそうです。

脳が機能しなくなった状態とは､それが未発達の状態と似ています｡すなわち、脳が働かなくなった状態が認知症、未発達の状態が子どもであると考えることが出来るのではないでしょうか。どちらも脳の働きが十分でなく、脳と体の間にズレが生じている点は共通します。だから、脳も体も健康な大人たちは、こうした認識のもと、認知症患者や子どもたちに対し、生活行動における善と悪などを根気よく理解させ、指導していかなくてはなりません。

まさに、まだ脳が未発達の状態である子どもたちは、好奇心や興味本位で行動し、時にまちがいを起こしてしまうこともあります。それゆえに、私たちおとなは、子どもがまだ成長の途上にあることを了解し、見守りながら目線を同じくして、根気強く指導していかなければならないのだ、と再認識させられた講演でした。

（文責　本部）